

7月予報（全16枚）

病防第34号
平成22年6月29日

関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）
平成22年度発生予報第4号を下記のとおり発表したので送付します。

平成22年度病害虫発生予察予報第4号（7月予報）

平成22年6月29日
熊 本 県

1 向こう1ヶ月の気象予報：平成22年6月25日福岡管区気象台発表（単位：％）

要 素	予 報 対 象 地 域	低い （少ない）	平年並	高い （多い）
気 温	九州北部全域（含、山口県）	10	40	50
降 水 量	九州北部全域（含、山口県）	30	40	30
日照時間	九州北部全域（含、山口県）	30	40	30

2 発生予報 概要

作 物		病害虫名	発 生 量		作 物		病害虫名	発 生 量	
			平年比	前年比				平年比	前年比
水 稲	早期	穂いもち	やや少	並	水 稲	早植・ 普通期	ツマゲ・ロコハ・イ	並	並
	早植	葉いもち	やや少	並			ヒメトビ・ウカ	並	並
	普通期	葉いもち	並	並			セジ・ウカ	やや多	やや多
	早期・早 植	紋枯病	並	並			トビ・ウカ	並	やや少
	早期	かみじ類	並	少			コブ・メイガ	並	並

作物	病害虫名	発生量		作物	病害虫名	発生量	
		平年	前年比			平年比	前年比
茶	炭疽病	並	並	カンキツ	かいよう病	ㇿ少	並
	ㇿノカクモハヰ	ㇿ少	並		黒点病	並	並
	ㇿノホソガ	ㇿ少	並		ミカンハダニ	少	少
	ㇿノヰㇿミヲ	ㇿ多	ㇿ多		ㇿノヰㇿミヲ	並	並
	ㇿノミト ㇿメコハ`イ	並	ㇿ少	ナ シ	黒星病	並	並
	カザ`ワダニ	少	少	カ キ	炭疽病	ㇿ少	並
	ㇿシㇿカㇿラムシ	ㇿ多	ㇿ多	ブドウ	べと病	ㇿ多	並
				果樹全般	果樹カムシ類	並	ㇿ少

作物	病害虫名	発生量		作物	病害虫名	発生量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
夏秋トマト (高冷地)	葉かび病	並	並	夏秋 果菜類	コナジラミ類	並	並
	すすかび病	並	並		アザミウマ類	並	並
	灰色かび病	並	並				
夏秋ナス (平坦地)	すすかび病	並	並	イチゴ (育苗床)	ハダニ類	少	少
夏秋ㇿㇿㇿ (高冷地)	べと病	並	並	キャベツ (高冷地)	コナガ	ㇿ少	ㇿ少
イチゴ (育苗床)	炭疽病	並	並	野菜全般	ハスモンヨトウ	並	並
	うどんこ病	ㇿ多	多		オオタバコガ	並	並
キャベツ (高冷地)	細菌性病害 (黒腐病等)	並	並				

3 予報概要、根拠、対策等

水稻

1) 穂いもち(早期)

(1) 発生量: やや少

(2) 根拠 ア 6月の早期水稻の巡回調査では、葉いもちの発生は認められず(平成8.9%)、平成比少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平成比少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平成より高く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア ほ場を見回り、発生に注意する。葉いもちの発生が多いほ場では、穂ばらみ後期に薬剤散布を行う。

2) 葉いもち(早植)

(1) 発生量: やや少

(2) 根拠 ア 6月の早期水稻の巡回調査では、葉いもちの発生は認められず(平成0.4%)、平成比やや少の発生であった。

イ BLASTAMの判定結果では、6月の好適条件出現日数は0~2日(前年0~2日)と前年並であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平成より高く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア いもち病は、平均気温15~25℃で多湿の時に発生しやすい。低温で降雨が続く時には発生に注意し、発生初期に薬剤散布を行う。

3) 葉いもち(普通期)

(1) 発生量: 並

(2) 根拠 ア 普通期水稻のほ場では、定植後および置き苗でのいもち病発生は認められなかった。

イ 病害虫防除員からの報告では、苗いもちの発生は平成比やや多~少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平成より高く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア いもち病は、平均気温15~25℃で多湿の時に発生しやすい。低温で降雨が続く時には発生に注意し、発生初期に薬剤散布を行う。

4) 紋枯病(早期・早植)

(1) 発生量: 並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生は認められず(平成0.0%)、平成並の発生であった。

イ 気象予報によると、7月の気温は平成より高く、降水量は平成並の予想である。

(3) 対策 ア 穂ばらみ期に発病株率が20%以上の時には、穂ばらみ期から出穂期にかけて薬剤散布を行う。

5) カメムシ類(早期)

(1) 発生量: 並

(2) 根拠 ア 上天草市松島町におけるイタリアンライグラス及びイネ科雑草でのすくい取り調査では、最重要種であるクモヘリカメムシの10回振り捕獲数が5.6頭(平成6.3頭)で平成並であった。ホソハリカメムシ、アカスジカスミカメ、シラホシカメムシ及びミナミアオカメムシの捕獲数は平成より少なかった。

イ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

- (3) 対策 ア クモヘリカメムシでは穂揃い期の密度が1~2頭/100m²を超えると斑点米率が0.1%以上となるなど、斑点米カメムシ類の加害は低密度でも品質に影響を与えるので、出穂期から成虫の発生に注意する。

イ 防除適期は、穂揃い期とその7~10日後(乳熟期)である。

ウ カメムシ類は広範囲に移動するため、広域で一斉防除を行うと効果が高い。

エ 水稻出穂後に周辺雑草を除草すると、本田への飛来を助長するので行わない。

オ 平成22年6月23日付け技術情報第4号(斑点米カメムシ類)を参照。

6) ツマグロヨコバイ(早植・普通期)

- (1) 発生量: 並

- (2) 根拠 ア 6月の早期・早植水稻の巡回調査では、株当たり0.1頭(平年0.2頭)と平年並の発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)の予察灯における捕獲数は、5月1半旬~6月4半旬まで平年並であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比少であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は平年より高い予想である。

7) ヒメトビウンカ(早植・普通期)

- (1) 発生量: 並

- (2) 根拠 ア 6月の早期・早植水稻の巡回調査では、株当たり0.1頭(平年0.6頭)と平年比やや少の発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)の予察灯およびネットトラップにおける捕獲数は、5月1半旬~6月4半旬まで平年並であった。

ウ 病害虫防除員の報告では、6月の発生は平年並~少であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は平年より高い予想である。

- (3) 対策 ア ヒメトビウンカはイネ縞葉枯病を発生させるので、本田初~中期のヒメトビウンカの発生に注意し、発生量が多い場合は本田防除を行う。

イ カーバメート系剤およびIGR系剤で感受性の低下が確認されているので、薬剤の選定には注意する。

ウ 最新の飛来情報は、病害虫防除所のホームページを参照。

8) セジロウンカ(早植・普通期)

- (1) 発生量: やや多

- (2) 根拠 ア 6月の早期・早植水稻の巡回調査では、株当たり0.01頭(平年1.2頭)と平年比やや少の発生であった。

イ 予察灯での5月1半旬~6月4半旬の捕獲数は、生産環境研究所(合志市)で47頭(平年27.4頭)、天草農業研究所(天草市)で491頭(平年231.4頭)と平年より多かった。また、生産環境研究所(合志市)のネットトラップにおける5月1半旬~6月4半旬の捕獲数は、74頭(平年35.5頭)と平年より多かった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高い予想である。

- (3) 対策 ア 本田の密度が移植後10日までに2~5頭/株、移植後11日以降に6~10頭/株の時には、薬剤散布を行う。

イ 育苗箱施薬剤を使用していない場合は、発生に注意する。

ウ プリンス剤に対して感受性の低い個体群が確認されている。薬剤の残効が

短い場合があるので、育苗箱施薬剤を使用したほ場においても本田での発生に注意する。

エ 最新の飛来情報は、病虫害防除所のホームページを参照。

9) トビイロウンカ(早植・普通期)

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生は認められず(平年の株当たり0.0頭)、平年並の発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)の予察灯およびネットトラップでは、6月17日に初飛来(1頭)を確認した(過去10年平均の初飛来日6月12日)。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア 今後の飛来情報および本田での発生に注意する。7月下旬～8月上旬に本田の密度が20頭以上/100株の場合は、ただちに薬剤散布を行う。

イ アドマイヤー剤に対して感受性の低い個体群が確認されている。薬剤の残効が短い場合があるので、育苗箱施薬剤を使用したほ場においても本田での発生に注意する。

ウ 育苗箱施薬剤と本田期の防除薬剤には同一系統を使わない。

エ 最新の飛来情報は、病虫害防除所のホームページを参照。

10) コブノメイガ(早植・普通期)

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生は認められず(平年の巻葉数0.0枚/株)、平年並の発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、6月3日に初めて捕獲された。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア 今後の飛来情報および本田での発生に注意する。第1世代の被害株率が20%以上の時には、第2世代幼虫期(飛来世代 第1世代幼虫～成虫 第2世代幼虫)に薬剤散布を行う。

イ コブノメイガに効果のある育苗箱施薬剤を使用していないほ場では、発生に注意する。

ウ 最新の飛来および防除適期の情報は、病虫害防除所のホームページを参照。

茶

1) 炭疽病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発病葉は0.3葉/m²(平年1.3葉/m²)と平年比やや少の発生であった。

イ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 梅雨期は、感染に好適な条件になりやすい。常発地では、摘採残葉の発病状況等に注意し、三番茶萌芽期～1葉期に防除を行う。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

2) カンザワハダニ

(1) 発生量：少

- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生葉率0.5% (平年4.9%) と平年比少の発生であった。
 イ 茶業研究所 (御船町) の調査では、平年比少の発生であった。
 ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～少であった。
 エ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 密度が高い場合、十分な防除効果が得られにくいため、発生初期の防除を心がける。
 イ 本虫の経済的被害許容水準は、卵、幼虫または成虫の寄生葉率20%以下である。
 ウ 摘採前に発生が多い場合は、摘採時期を早めて被害を軽減する。
 エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤をローテーション使用する。
- 3) チャノコカクモンハマキ
- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、被害葉数0.4葉 / m² (平年0.6葉 / m²) と平年並の発生であった。
 イ 生産環境研究所 (合志市) のフェロモントラップ調査における発蛾最盛期は平年より1半旬早い6月第3半旬で、最盛期の誘殺数は平年より少なかった。
 ウ 茶業研究所 (御船町) のフェロモントラップにおける誘殺数は、平年比少であった。
 エ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 次世代の発蛾最盛期は7月3～4半旬 (平年比やや早) と予想される。
 イ 防除適期は、発蛾最盛期から7～10日後の若齢幼虫期である。通常、各茶期の摘採直後が防除適期になる。
- 4) チャノホソガ
- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めず平年比少の発生であった (平年の被害葉数6.4葉 / m²)。
 イ 生産環境研究所 (合志市) のフェロモントラップにおける誘殺数は、5月6半旬に平年比多であったが、6月4半旬には平年並となった。
 ウ 茶業研究所 (御船町) のフェロモントラップにおける誘殺数は、平年比やや少であった。
 エ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比少であった。
 オ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 産卵は新葉にのみ行われるので、三角葉巻前の萌芽～1葉期に防除する。
 イ 本虫の経済的被害許容水準は、1m²当たりの巻葉数が30～50個以下である。
 ウ 摘採間近になって三角葉巻が見られた場合は、摘採を早めて被害を軽減する。
- 5) チャノキイロアザミウマ
- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生葉率15.3% (平年10.4%) と平年比やや多の発生であった。
 イ 生産環境研究所 (合志市) の粘着トラップ調査では6月3半旬に平年比多の

発生であったが4半旬には平年並の発生となった。

ウ 茶業研究所（御船町）の調査では、6月以降平年比多の発生である。

エ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや少であった。

オ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

（３）対策 ア 三番茶を摘採する園では、萌芽期から1葉期に防除を行う。また、二・三番茶摘採後も摘採残葉や遅れ芽で増殖し、次茶期の発生源となるため、摘採後に防除を行う。

イ 中切り等の更新園、摘採中止園などでは、茶芽生育期間が長く、長期にわたり被害を受けやすいので、残効の長い薬剤（合成ピレスロイド系剤、ネオニコチノイド剤）で防除する。

6）チャノミドリヒメヨコバイ

（１）発生量： 並

（２）根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生葉率4.3%（平年2.8%）と平年並の発生であった。

イ 茶業研究所（御船町）の調査では、平年並の発生であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや多～並であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

（３）対策 ア 本虫の経済的被害許容水準は、被害芽率5～8%以下である。

イ 新芽を加害するので、萌芽～1葉期に防除を行う。

ウ 発生時期が重なるチャノホソガ、チャノキイロアザミウマとの同時防除を行う。

7）クワシロカイガラムシ

（１）発生量： やや多

（２）根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生株率9.3%（前年10.4%）であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比多～並であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

（３）対策 ア 防除適期は、卵塊全体の60～80%になった時期（ふ化最盛期）である。

イ アメダス地点の温度データを利用した有効積算温度シミュレーションによる第二世代ふ化最盛日は、鹿北(7月23日)、菊池(7月16日)、甲佐(7月14日)、水俣(7月12日)、上(7月16日)と予想された(6月18日現在の気象データから算出)。有効積算温度シミュレーションにて予測されるふ化最盛日は、熊本県病害虫防除所のwebページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」に情報を掲載。

ウ ふ化最盛期は、今後の気温により変動し、地域によってばらつきもあるので、ほ場をよく観察するとともに発生状況に注意して防除時期を判断する。

カンキツ

1）かいよう病

（１）発生量： やや少

（２）根拠 ア 6月の巡回調査では、新葉の発病を認めず平年比少の発生であった（平年の発病葉率2.7%）。

イ 果樹研究所（宇城市）の無防除の甘夏における調査では、春葉での初発日

は5月20日（ 平成5月22日 ）で 平成並、果実の初発日は6月14日（ 平成6月18日 ）で 平成より早かった。

6月4半旬の調査では、発病葉率1.5%（ 平成3.1% ） 発病果率2.0%（ 平成3.1% ）で 平成並の発生であった。

ウ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は 平成やや少～少であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は 平成より高く、降水量は 平成並の予想である。

（ 3 ）対策 ア 発病した葉・枝・果実が伝染源である。特に春葉の発病葉は、果実、夏秋梢への感染源となるので剪除する。

イ 夏秋梢のミカンハモグリガの食害痕に発生しやすいので、ミカンハモグリガを防除するか、夏秋梢を剪除する。

ウ 果樹研究所（ 宇城市 ）の無防除の果実の発病最盛期は、6月5半旬～7月4半旬である。

2 ）黒点病

（ 1 ）発生量：並

（ 2 ）根拠 ア 6月の巡回調査では、果実の発病を認めず 平成並の発生であった（ 平成の発病果率0.0% ）。

イ 果樹研究所（ 宇城市 ）の無防除の「興津早生」では、発病果率14%（ 平成30.6% ）と 平成比やや少の発生であった。

ウ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は 平成並～やや少であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は 平成より高く、降水量は 平成並の予想である。

（ 3 ）対策 ア 果樹研究所（ 宇城市 ）における果実の発病最盛期は、7月2半旬～5半旬である。

イ 保菌率が高く、伝染源となりやすい直径5～10mmの枯枝る枯枝はなるべく剪除する。

ウ 無防除の果実では、降雨後1～2日で発病する。

エ 前回散布から累積降水量200～250mmまたは25～30日経過したら薬剤を散布する。

3 ）ミカンハダニ

（ 1 ）発生量：少

（ 2 ）根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生葉率12.5%（ 平成25.5% ）と 平成比やや少の発生であった。

イ 果樹研究所（ 宇城市 ）の調査では、発生を認めず 平成比少の発生であった（ 平成の寄生葉率22.5% ）。

ウ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は 平成並～少であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は 平成より高く、降水量は 平成並の予想である。

（ 3 ）対策 ア 定期的に園を見回り、雌成虫の寄生葉率30～40%、10葉当り5～10頭に達したら防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

4 ）チャノキイロアザミウマ

（ 1 ）発生量：並

（ 2 ）根拠 ア 6月の巡回調査では、被害を認めなかった。

イ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年並～やや少であった。
ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

- (3) 対策 ア アメダス地点の有効積算温度シミュレーションによる第四世代の発生ピーク(防除適期)は、熊本(7月14日)、三角(7月19日)、八代(7月15日)、水俣(7月17日)、本渡(7月17日)と予想された(6月18日現在の気象データから算出)。
発生ピークは、今後の気温により変動し、地域によってばらつきもあるので、ほ場をよく観察するとともに発生状況に注意して防除時期を判断する。
イ 有効積算温度シミュレーションにて予測される発生ピーク(最新の予測は、熊本県病虫害防除所のwebページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」に情報を掲載)。
ウ 果実洗浄発法で調査し、要防除密度である10頭/100果を越えた場合は防除する。
* 果実洗浄法
展着剤あるいは洗剤を5,000～10,000倍に薄めてコップやビーカーに入れ、液で果実(100果)を洗い、洗った液をティッシュペーパーでこし、ルーペや実体顕微鏡で虫数を計数する。

ナシ

1) 黒星病

(1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めず平年比やや少の発生であった(平年の発病葉率0.8%)。
イ 果樹研究所による現地調査では、ほ場により発生量が異なり多発ほ場も認められている。
ウ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや多～やや少であった。
エ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。
(3) 対策 ア 不要な枝は、剪除して薬剤がかかりやすくする。
イ 発病した葉や果実は、園外に処分する。
ウ 梅雨期には園の排水に努める。
エ 「幸水」など本病に感受性の高い品種では、収穫約2週間前ころまで感染し、発病するので、防除を徹底する。

カキ

1) 炭疽病

(1) 発生量：やや少

- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めず平年比やや少の発生であった(平年の発病葉率0.8%)。
イ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年比少であった。
ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。
(3) 対策 ア 発病した徒長枝が多いと病原菌の密度が高まり、果実の発病も多くなる。
発病した徒長枝は園外に処分する。
イ 新梢、果実とも発病後の防除では効果がないので、予防防除に努める。

ブドウ

1) ベと病

(1) 発生量：やや多

- (2) 根拠 ア 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや多であった。
イ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 発病後の薬剤防除では効果が低いので、薬剤の予防散布を徹底する。
イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

果樹全般

1) カメムシ類

(1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 生産環境研究所（合志市）の予察灯による誘殺数調査では、チャバネアオカメムシは平年並、合志市は平年比やや少であった。
イ 天草農業研究所（天草市）の予察灯による誘殺数調査では、チャバネアオカメムシは平年並、ツヤアオカメムシは平年比少であった。
ウ 果樹研究所（宇城市）の予察灯では、チャバネアオカメムシは平年並、ツヤアオカメムシは平年比少であった。
エ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～少であった。
オ ヒノキ球果の口針鞘数は、県内5地点（熊本市河内町、宇城市松橋町・三角町、合志市栄、大津町）のうち6月中旬に1地点（合志市栄）から吸汁痕が認められた。
- (3) 対策 ア 離脱（樹園地への飛来）の目安となる口針鞘数は、1球果当たり25個である。
イ 予察灯およびフェロモントラップの調査データは、ホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」を参照。
ウ 果樹園への飛来初期は局在し、発見が遅れやすいため、園をよく見回り、早期発見に努める。

野菜病害

夏秋トマト（高冷地）

1) 葉かび病

(1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 夏秋トマト産地で導入されている品種は、ほとんどが葉かび抵抗性品種である。6月の巡回調査で葉かび病抵抗性品種を調査したところ、葉かび病の発生を認めず、平年並の発生であった（平年の発病株率0.0%）。
イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～少であった。
ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 県内では、葉かび病抵抗性遺伝子 *Cf-9* を持つ品種に感染するレースが確認されている（平成22年1月7日付特殊報第1号参照）。抵抗性品種でも発病には注意する。発病した場合は、早期に慣行の葉かび病対策を行う。
イ 草勢が衰えると多発するため、肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。

- ウ 換気を良くし、過湿防止に努める。
- エ 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き、園外に処分する。
- オ 早期発見に努め、発病初期のうちに葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行う。
- カ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

2) すすかび病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠
 - ア 6月の巡回調査では、発生を認めず、平年並の発生であった（平年の発病株率0.0%）。
 - イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～少であった。
 - ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策
 - ア 草勢が衰えると多発するため、肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。
 - イ 換気を良くし、過湿防止に努める。
 - ウ 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き、園外に処分する。
 - エ 早期発見に努め、発病初期のうちに葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行う。
 - オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

3) 灰色かび病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠
 - ア 6月の巡回調査では、発生を認めず、平年並の発生であった（平年の発病株率0.0%）。
 - イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比並～少であった。
 - ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策
 - ア 換気を良くし、過湿防止に努める。
 - イ 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。
 - ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

夏秋ナス（平坦地）

1) すすかび病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠
 - ア 6月の巡回調査では、一ほ場は多発生であったが、それ以外では発生を認めず、平年並の発生であった（発病株率11.7.%、平年3.6%）。
 - イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比少であった。
 - ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策
 - ア 換気を良くし、過湿防止に努める。
 - イ 伝染源となる発病葉は早めに取り除き、施設外へ持ち出し処分する。

- ウ 多発後は防除が困難なので、初期防除を徹底する。本病は葉裏から発生するため、葉裏にも十分かかるように薬剤散布を行う。
- エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

夏秋キュウリ（高冷地）

1）べと病

- （１）発生量：並
- （２）根拠 ア 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年並であった。
イ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。
- （３）対策 ア 肥料切れしないように適正な肥培管理に努める。
イ ほ場の排水を良くし過湿防止に努める。
ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

イチゴ（育苗床）

1）炭疽病

- （１）発生量：並
- （２）根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めなかった（平年の発病株率0.3%）。
イ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年並～少であった。
ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。
平年並または多い予想である。
- （３）対策 **ア 降雨による病原菌の飛散を防止するため、親株床、育苗床にはビニールで雨よけする。また、全面マルチや高設育苗を行い、泥水の跳ね返りを防止する。**
イ 頭上灌水は避け、株元に手灌水する。
ウ 育苗ポットの間隔を広げ、不要な下葉を除去し通風採光を良くする。
エ 発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。
オ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。特に、降雨後の摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので防除を行う。
カ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

2）うどんこ病

- （１）発生量：やや多
- （２）根拠 ア 6月の巡回調査では、発病株率11.3%（平年6.0%）と平年比やや多の発生であった。
イ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年比多～やや多であった。
ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。
降水量は平年並または多い予想である。
- （３）対策 **ア 盛夏期には潜在感染して菌そうが見えなくなるため、7月のうちに菌そう**

を確認し、防除を行い菌密度を下げておく。

イ 発病葉は早めに取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。

ウ 薬剤散布は葉裏に十分かかるようにする。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

夏秋キャベツ（高冷地）

1）細菌性病害（黒腐病、軟腐病、黒斑細菌病）

（１）発生量：並

（２）根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めず、平年並の発生であった（平年の発病株率黒腐病0.6%、軟腐病0.0%、黒斑細菌病0.0%）。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

（３）対策 ア ほ場の排水を良くする。

イ 被害残さの処分など、ほ場の衛生管理を徹底する。

ウ 発病後の防除は困難なので、常発ほ場では予防防除を行う。

野菜虫害

夏秋果菜類

1）コナジラミ類

（１）発生量：並

（２）根拠 ア 6月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生葉率5.0%（平年4.6%）と平年並、高冷地のトマトでは寄生葉率が1.3%（平年4.8%）と平年比やや少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生はナス、キュウリで平年並、トマトで平年比やや少～少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高い予想である。

（３）対策 ア これから気温が高くなると発生が多くなるので、黄色粘着トラップを設置し、早期発見に努め、初期防除を徹底する。

イ タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、ウリ類退緑黄化病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する。

ウ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除草する。

エ 県内で発生しているタバココナジラミのほとんどは、バイオタイプQである。タバココナジラミバイオタイプQは、有効な薬剤が少ないので薬剤の選定に注意する。

オ 薬剤散布は、下位葉や葉裏など植物全体に十分かかるようにする。

カ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

2）アザミウマ類

（１）発生量：並

（２）根拠 ア 6月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生葉率9.3%（平年9.1%）と平年並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生はナス、キュウリと平年並であ

った。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 **ア メロン黄化えそウイルスに感染するキュウリ、メロン、スイカなどのウリ科作物は、育苗期から物理的防除を中心に管理を徹底する。**

イ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除草する。

ウ ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色の粘着トラップ等を設置し、早期発見に努める。

エ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

イチゴ（育苗床）

1) ハダニ類

(1) 発生量：少

(2) 根拠 **ア** 6月の巡回調査（育苗床）では、発生を認めず、平年比少の発生であった（平年の寄生株率18.1%）。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年やや多～並の発生であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 **ア** 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期に下位葉を重点に防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

夏秋キャベツ（高冷地）

1) コナガ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 **ア** 6月の巡回調査では、寄生株率1.7%（平年13.3%）で平年比少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比並～少であった。

ウ フェロモントラップによる誘殺数は、阿蘇市波野で平年比少、山都町鶴底で平年比やや少であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 **ア** 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早期発見、早期防除に努める。また、幼虫は葉裏に寄生しているので、薬剤は葉裏まで十分かかるように丁寧に散布する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

野菜全般

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 **ア** 6月の巡回調査では、発生を認めず、平年並の発生であった（平年の寄生株率イチゴ0.0%、トマト0.0%、ナス0.0%、キャベツ0.0%）。

イ フェロモントラップによる誘殺数は、い業研究所（八代市鏡町）、生産環境研究所（合志市）、高原農業研究所（阿蘇市一の宮町）、阿蘇市波野及び山都町鶴底で5月下旬は平年比多であったが、6月に入り平年並となった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生はナスで平年比少、トマトで平年比並～少、キャベツで平年比並～少、イチゴで平年並～やや少であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は平年より高い予想である。

（３）対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵し、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら直ちに除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

オ 最新のフェロモントラップデータは、病害虫防除所のホームページを参照。

２）オオタバコガ

（１）発生量：並

（２）根拠 ア 6月の巡回調査では、平坦地のナス、高冷地のトマトでは発生を認めず、平年並の発生であった（平年の寄生株率ナス0.0%、トマト0.0%）。

イ フェロモントラップによる誘殺数は、生産環境研究所（合志市）、高原農業研究所（阿蘇市一の宮町）、い業研究所（八代市鏡町）で平年並、山都町鶴底で5月下旬は平年比多であったが、6月中旬には平年比やや少となった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生はナスで平年比少、トマトで平年比並～少、イチゴで平年並～やや少であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は平年より高い予想である。

（３）対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、ほ場をよく見回り、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

エ 最新のフェロモントラップデータは、病害虫防除所のホームページを参照。

育苗期のコナジラミ類・アザミウマ類の防除対策！！

（１）播種10日前までに育苗ハウス内・周囲の雑草を防除する。

（２）育苗ハウスは本ぽと別に設け、ハウスの開口部（サイド、換気部など）には必ず目合い0.4mm以下の防虫ネットで、天井部は近紫外線除去フィルムで被覆し害虫の侵入抑制を図る。

（３）ハウス内に粘着トラップを設置し、侵入した害虫の密度を低下させる。

（４）定植2～3日前に、定植予定苗の株元に登録のある粒剤を処理する。

（５）発病苗は二次伝染源となるので、見つけ次第直ちに施設外に持ち出し処分する。

（６）野良生えは重要な伝染源となるので、徹底除去する。

農薬安全使用上の留意点

薬剤防除を行う際は、必ず登録のある農薬を使用し、ラベルなどで使用方法を確認し、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、薬剤の飛散により、ミツバチや魚介類など周辺動植物や環境へ影響がないよう、飛散防止対策を徹底するとともに、周辺住民や周辺の農業者・畜産業者・養蜂業者等へ事前に薬剤散布について連絡するなど、危害防止に努めましょう。

詳しい内容等については

生産環境研究所病害虫研究室（病害虫防除所）（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。

なお、本文はホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。